

## 科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 28 年 6 月 24 日現在

機関番号：82723

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2012～2015

課題番号：24520036

研究課題名(和文) 近代批判思想の戦後 ハイデガーと京都学派におけるナショナリズムの批判と再構築

研究課題名(英文) The Critique of Modernity in the Post-war Period--Critical Assessment of Nationalism by Heidegger and the Kyoto-School

研究代表者

轟 孝夫 (Todoroki, Takao)

防衛大学校(総合教育学群、人文社会科学群、応用科学群、電気情報学群及びシステム工・その他部局等・教授)

研究者番号：30545794

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,000,000円

研究成果の概要(和文)：ハイデガーや京都学派、和辻哲郎という20世紀を代表する哲学者は、彼らの近代批判的な思想に立脚して支持した体制が第二次世界大戦の終結とともに崩壊した後、政治的主張からは距離を取ったように見られることが多かった。それに対して本研究では、彼らが戦時中、ないしはそれ以前から、自身の近代批判に基づいて同時代の政治にどのように関わろうとしていたのかを分析した上で、彼らが戦後も基本的には政治・思想的立場を変えることなく、むしろその延長線上で同時代の政治的状况を捉えようとしていたことを明らかにした。

研究成果の概要(英文)：It is widely held that Heidegger, the Kyoto-school and Tetsuro Watsuji, the most prominent philosophers of the 20th century, distanced themselves from political self-assertion after the collapse of the regimes to which they had been in their own way committed. In my research I analyzed how they tried to correct the policies of the regimes during/ before the war which they saw implausible in terms of their critique of modernity and then made clear that they maintained their earlier politico-philosophical positions, by means of which they readily interpreted the political situation of the post-war period.

研究分野：現代哲学(現象学、解釈学、実存哲学)、近代日本哲学

キーワード：ハイデガー 京都学派 和辻哲郎 近代批判 ハイデガーの技術論 大東亜共栄圏 和辻の尊皇思想  
ハイデガーと反ユダヤ主義

## 1. 研究開始当初の背景

ハイデガー、ならびに西田幾多郎をはじめとする京都学派の哲学は今日なお多くの人々の関心を集めている。両者はそれぞれ西洋の哲学的伝統との対決に基づいて、西洋近代、ないしはその思想的基盤を乗り越えようとする立場を取るが、そのような超克的な思想と取り組む際に避けて通ることができないのが、彼らの政治的なアンガジマン、すなわちハイデガーにおいてはナチズム加担、京都学派においては戦争協力の問題である。近年刊行された諸資料から、彼らの政治加担は彼らの哲学の近代批判的な立場に基づいた主体的なコミットメントであったことが示されている。

しかし、このように彼らの政治的加担とその近代批判的思惟との根本的な関係が明らかになるにつれ、そうした思想を今日なお意味あるものと見なしうるのかという問いが避けられなくなってくる。近代批判思想一般を政治的に危険なものとして退ける立場を取るのであればいざ知らず、現代思想の近代批判的要素を意義あるものと見なしつつ、ハイデガーや京都学派の政治関与を問題視する場合、そうした批判者自身の近代批判の立場がどれくらいその両者から差別化できるかが問われざるをえない。しかし、ハイデガーと京都学派の近代批判が包括的で根源的であればあるだけ、そのような差別化は難しく、また曖昧なままであることが多い。

もっとも、このような問いは現代のわれわれにとって問題である以前に、ハイデガーや京都学派の哲学者自身が、戦後に自分たちに向けられた批判のただ中で、おのれの近代批判的立場を維持しようとする場合に直面し、また何らかの形で思想的に応答せねばならないものでもあったはずである。こうして本研究では、彼らが自分たちに対する批判にどのように応答したかを彼らの戦後の哲学的言説そのもののうちに探ることで、同時に今日のわれわれ自身にとっての近代批判的思想の可能性(ないしは不可能性)を吟味するという本研究の着想に至ることとなった。

## 2. 研究の目的

20世紀のドイツと日本をそれぞれ代表する哲学者(学派)であるハイデガーと京都学派が、彼らの近代批判的な思想に基づいて行った政治的なアンガジマンは、第二次大戦後に厳しい批判にさらされた。本研究では彼らが自己の政治加担をどのように反省し、またそれを戦後の思想の展開にいかんにか反映させたかを検討することにより、近代批判的な思想一般がその政治的な危険性にもかかわらず、今日なおいかなる意義をもちうるかを彼ら自身の視点に即して明らかにする。本発表ではさらにハイデガーと京都学派の両者を比較することによって、研究を単に哲学史的な事実の確認にとどめることなく、現代における近代批判思想一般の可能性の考察に

もつなげていきたい。

## 3. 研究の方法

本研究は、ハイデガーと京都学派の哲学者たちが、戦後、彼らの政治的アンガジマンに対する批判にさらされながら、どのような思想形成を行ったかを思想的に明らかにすることを目指すため、当時の時代状況を念頭に置きつつ、彼らのテクストを哲学的に読解することが研究の基本となる。その際、彼らの戦前の立場からの変化が問題になるため、戦前の思想について、その政治的含意に目配りしつつ基本的な内容を把握した上で、戦後の思想との比較を行い、その変化(ないしは不変化)の意義を明らかにする。

本研究はこの成果に立脚して、さらにハイデガーと京都学派の比較思想的な対比を行い、そのことにより戦後という時代において近代批判思想一般がいかなる可能性をもちうるかの解明を試みる。なお本研究では、一般には京都学派には含まれないが、それと同時代に活躍し、人間関係においても密接な結びつきを保っていた和辻哲郎の業績も参照することにする。というのも、日本の近代批判においては天皇を中心とするその政治体制の独自性が元来、強調されてきたが、和辻は日本倫理思想史において、まさにこの天皇の日本史における意義についての考察を展開しており、その点で日本的な近代批判の特長が京都学派以上に明確に現れているため、ハイデガーの近代批判との比較でとくに有用と考えたためである。

## 4. 研究成果

本研究の研究成果を以下、(1)~(3)で年度順に記していき、最後の(4)で本研究の国内外における位置づけやインパクト、ならびに今後の展望を記すことにする。

(1)本研究の1年目は、ハイデガーに関しては戦後の思想的立場を明らかにすることを課題とした。彼の戦後の思想に関しては、とかく戦前の思想との断絶が強調され、しかもそれがナチス加担に対する反省に由来するとされることが多い。しかしハイデガーは、主体性の本質を存在忘却として「悪」と規定したうえで、そうした主体性の支配は戦争の終結によっては何も変わっていないと終戦直後に断言しており、彼の思想の断絶という見方には根拠がない(雑誌論文)

日本の近代批判思想に関しては、おもに和辻哲郎と取り組み、戦中の尊皇論と戦後の象徴天皇論の比較考察を行った。そのことによって明らかになったのは、彼の日本倫理思想史の根幹をなす尊皇論が、まずは戦前、戦中の国体論者に対する暗黙の抵抗として形成され、それ自身きわめて「政治的な」動機をもつことである。また尊皇論のそうした由来ゆえに、戦後も彼は自分の立場を変更する必要性を認めていない。このように「国体」という言葉の使用を徹底的に避けつつ尊皇論

を説く和辻の姿勢は、「国体」合理的解釈により、国体論の暴走に歯止めをかけようとした西田幾多郎の姿勢とも際立った対照をなしている。

なお日本の哲学者の「近代の超克」が必然的に国体、天皇に対する態度決定を伴う点は、ハイデガーなどと比較すると非常に興味深く、よくも悪くも日本の近代批判思想の独自性を示している。このようにハイデガーと京都学派、和辻の比較から、それぞれの近代批判思想の地域的特色とでもいうものを浮き彫りにできたことも1年目の貴重な研究成果である（学会発表、雑誌論文）。

(2)本研究の2年目は、ハイデガーの戦後の思索とその政治的含意の解明に関しては、ハイデガーの戦後の民主主義に対する批判的な態度が、1930年代後半に元来、総動員体制に対する批判的考察として形作られた彼の技術論を背景にしていることを拙論「テクノロジーとデモクラシー——ハイデガー技術論の観点から」(雑誌論文)で明らかにした。技術社会において、人間は自然と歴史の技術的な支配を貫徹することへと取り込まれていくが、このことが表面上は人間による技術の掌握として捉えられ、また技術の民主化として理解される。しかし、ハイデガーによるとこのことは仮象にすぎず、人間は決して技術を自分の手中に収めることはできないのである。

日本近代哲学に関しては、前年度の和辻哲郎の『日本倫理思想史』の研究をさらに深め、和辻が尊皇思想のうちに、他者に対する寛容を旨とする日本固有の正義観念を見て取り、それを一神教の排他性と対置していることを拙論“Gerechtigkeit aus japanischer Sicht— Unter besonderer Berücksichtigung des *Nihon rinri shisou-shi* von Tetsurō Watsuji”(学会発表、雑誌論文)において示した。こうした和辻による一神教の批判は、絶対神による命令という観念をモデルとした西洋の政治概念を批判するハイデガーの議論にも通じるものがある。しかし和辻の場合はハイデガーとは異なり、現代テクノロジーに対する根本的な批判を欠いているため、天皇をも制約するとされる共同体の「全体性」が無自覚にテクノロジーによって規定された現代国家と等置されてしまっていることを上掲の拙論では問題点として指摘した。

またハイデガーと京都学派の政治関与のあり方、またその背景にある歴史哲学の比較については、年来の研究をまとめて、ドイツ語の論稿„Staat und Technik bei Heidegger und in der Kyōto-Schule”として発表した(雑誌論文)。この論考ではまずハイデガーによる近代国家批判を取り上げ、それが彼の技術批判と密接に結びついていることを示した。逆に、彼のよく知られた技術論は近代国家体制の批判という政治的意味をもっている。それに次いで今度は、京都学派が日

本海軍への協力の一環として遂行した大東亜共栄圏の哲学的基礎づけを概観し、彼らの歴史哲学がもつ政治性を明らかにした。最後にハイデガーと京都学派の近代批判を比較し、後者が技術に対する批判的意識を欠いている点が戦争肯定にもつながっている点を指摘した。

(3)本研究の3~4年目においては、まずハイデガーの学長就任演説「ドイツ大学の自己主張」の詳細な分析を行った(図書)。1933年の学長就任演説の時点で、彼はすでにナチスの人種主義に明確に反対し、大学のナチ化を推進しようとするドイツ学生団を牽制しつつ、他方で学問の細分化、専門化にも抗い、諸学問を自身の「存在の問い」によって「民族の世界」の知へと変革することを目指していた。

このようにハイデガーは、ナチス支持を表明していた学長在任中から、ナチスのイデオロギーとは一線を画しており、むしろ彼は自身の「存在の問い」によってナチスを自分の正しいと思う方向へと導こうとしていたのである。しかし学長職の挫折によって、彼はナチズムが自分の思想とは相容れないものであることを認識せざるをえなくなった。彼は学長辞任後も自分の思想を変えどころか、むしろそれを貫き通しており、またその姿勢がナチスに対する批判を含意することになるのである。

2014年春に「黒いノート」と呼ばれるハイデガーの未公刊の手稿が全集版として刊行され、そのうちに反ユダヤ主義的言明が見出されるということで、ドイツを中心に各国で大きな論議が巻き起こされた。これはまさにハイデガー哲学の政治的含意という本研究のテーマの核心に関わる問題であるため、本研究でも検討を行った(図書、学会発表)。「黒いノート」における問題の言明の解釈に当たっては、先ほど述べたようなハイデガーのナチスに対する基本的スタンスを考慮に入れる必要がある。つまり、彼の反ユダヤ主義的言明は、ナチスがユダヤ人を攻撃しつつ、それ自身が「ユダヤ的なもの」によって規定されていることを皮肉むという形で、つねにナチス批判として現れている。ここで「ユダヤ的なもの」とは、ハイデガーの「存在史」との関係で理解されなければならない。それはすなわち、あらゆる存在者を制作されたものと捉えるユダヤ一神教の創造説に由来し、ハイデガーが近代技術の本質と見なす「作為性」という存在了解を指している。このように「ユダヤ的なもの」を「人種」としてではなく、存在了解のあり方というレベルで理解した場合、ユダヤ人を攻撃するナチス自身が、そうした「ユダヤ的なもの」による支配を免れていないというのが、彼の反ユダヤ主義的とされる言明の真意である。

なお、そもそも刊行すれば大きな物議を醸すことが明らかな「黒いノート」を全集版の最後に刊行することをハイデガー自身が指

示したことは、彼が戦後になっても自分のスタンスをまったく改めていないことを示しており、このこと自体が彼による明確な哲学的＝政治的メッセージだったと言えよう。このように、ハイデガーのいわゆる「反ユダヤ主義的」言明には、彼の「存在の問い」とその政治的含意との交錯がもっとも先鋭化された形で示されており、その意味でこの問題の取り扱い、近代批判思想の政治的含意を取り上げる本研究の掉尾を飾るものとしてふさわしい題材であった。

(4) そもそも本研究の背景として、ハイデガーや京都学派の政治加担の問題に関して、とくにハイデガーについては全集版の刊行などによって、その思想的背景を示す資料はここ2～30年で飛躍的に増加しているにもかかわらず、そうした彼らの政治加担の動機となった思想の分析はほとんど進展していないという状況があった。2014年の「黒いノート」の刊行以来、そこでの「反ユダヤ主義的」とされる言明についてはただひたすら政治的非難が投げかけられるばかりであった。しかも多くの論者は彼の哲学そのものにも「反ユダヤ主義」というレッテルを貼り、それを哲学的にまじめに受け止める価値のないものとなえ主張するようになり、ハイデガーの政治的関与の思想的背景を冷静に解明することはこれまで以上に困難になった。

ハイデガーの「黒いノート」に関する拙論(図書)は、他の無数の論稿が「反ユダヤ主義的」な言明に対する政治的非難にほぼ終始しているのに対して、彼の「存在の問い」に照らしてその哲学的真意を解釈することに取り組んでいるという点で国内外においてユニークな位置を占めている。この拙論を下敷きにしたドイツ語の論稿を Heidegger-Jahrbuch の「黒いノート」特集号に掲載する予定となっている。ホロコーストの歴史をもつドイツにおいて、反ユダヤ主義に対する警戒心がとりわけ強いのは理解できるが、ハイデガーの「黒いノート」に関してはそれが否定的な形で作用しており、ドイツでの議論はハイデガーをただひたすら道義的、政治的に非難することに終始しており、テキスト分析の水準はきわめて低いと言わざるをえない。私としては上記の論稿をドイツ語で発表することにより、ハイデガーの反ユダヤ主義という問題について、テキストに即した冷静な議論を海外において促進することができればと考えている。

1990年代以降、刊行されたハイデガー全集の多くが彼の1930年代後半以降のナチスとの対決、さらにそれと密接に関連するテクノロジーや近代国家一般に対する批判など、まさに彼の哲学の政治性を明らかに示すテキスト群であることからすれば、彼の政治的立場をナチズムと同一視することは、今述べた近年刊行されたハイデガーの新資料のもっとも核心的な内容に目を閉ざすことに帰着する。こうしてまた、彼の「存在の問い」

に本質的に含まれるその政治的含意も捉えることができず、結果として、ハイデガー哲学の全体像を把握することも不可能となる。逆に本研究はハイデガー哲学の政治的含意に正面から取り組むことによって、従来のハイデガー研究にはない仕方での思想の全体像を明らかにしたと言えるだろう。

ハイデガー哲学の政治性に関する問題は、ハイデガー哲学の専門家が正面から取り上げることあまり好まない問題であるのに対して、専門家以外の読者層からはハイデガーの思想の中でももっとも大きな関心を寄せられる部分でもある。本研究の枠内で一般雑誌に発表した拙論「テクノロジーとデモクラシー——ハイデガー技術論の観点から——」(雑誌論文)において紹介したハイデガーのラディカルな技術批判は、生命倫理学の研究者や文芸評論家などの識者から高い評価を受けた。また本研究はハイデガーの思想の政治的含意に着目することにより、研究主題が従来の哲学研究の枠を超えた学際的な拡がりをもつことになり、第一次世界大戦勃発100周年を記念して刊行された論集『第一次世界大戦とその影響』(軍事史学会編)に本研究の成果の一部が「総力戦体制時代の哲学——ハイデガーと京都学派——」として掲載された(雑誌論文)。

最後に本研究の遂行を通して得られた今後の研究課題の展望について触れておきたい。先述のように、「黒いノート」におけるハイデガーのいわゆる反ユダヤ主義的言明は西洋形而上学の歴史に対する彼の捉え方を背景にして理解する必要がある。さらに言うと、彼の「存在の問い」そのものが元来、存在了解という水準で理解された「ユダヤ的なもの」に対する反対を含んでいる。こうした観点からあらためてハイデガーの教え子でもあったユダヤ人哲学者、エマニュエル・レヴィナスやハンナ・アーレントなどによるハイデガーとの思想的対決を捉え直すと、この対決は、ハイデガーの思想をナチズムのイデオロギーと単純に結びつけるような皮相な批判とは異なり、「ユダヤ的なもの」に対する批判というハイデガーの「存在の問い」の眼目を正当に見て取ったうえで、それに対して思想的に応答しようとした試みだと言える。こうしたことから、一方ではハイデガーの思索を「ユダヤ的なもの」についての根本的な省察と捉え、他方ではレヴィナスやアーレントによるハイデガー哲学に対する批判を「存在の問い」の潜在的モチーフをなす「ユダヤ的なもの」への批判との対決と捉えることによって、私は20世紀の哲学史を「ユダヤ的なもの」をめぐる省察という観点から捉え直してみたいと考えている。これまではレヴィナスやアーレントの立場を哲学的、道徳的に正当なものと前提としたうえで、そこからハイデガーのナチス加担やその背景にあると想定された彼の思想を批判するというスタンスの研究が大半だったが、そのよう

なやり方とは一線を画して、ハイデガーとレヴィナス/アーレントのどちらかに哲学的、道徳的に肩入れするのではなく、それぞれ「ユダヤ的なもの」をめぐる思想的立場として、その両者の思想を対比しながら記述していくということである。

なお彼らの「ユダヤ的なもの」に対する姿勢は、彼らの倫理的、政治的立場とも連動するのはもちろん、とくにホロコーストや全体主義をどのように解釈するかということとも密接に関連している。したがって、「ユダヤ的なもの」をめぐる異なった立場の争いという観点から 20 世紀の思想史を描き出すことは、20 世紀において人類が経験した出来事の意味を解明することにもそのまま直結するだろう。

4 年間にわたる科研費による本研究プロジェクトの遂行を通して、近代批判的な志向をもつ現代哲学の政治的含意という筆者の年来の研究テーマをさらに深めることができ、また今後の研究課題の展望を得ることができた。そのことに心からの感謝の意を表明して、本報告書の結びとしたい。

## 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計7件)

轟孝夫「総力戦体制時代の哲学——ハイデガーと京都学派——」、『第一次世界大戦とその影響』、軍事史学会編、査読有、2015年3月、454~472頁。

Takao Todoroki, „Gerechtigkeit aus japanischer Sicht—Unter besonderer Berücksichtigung des *Nihon rinri shisou-shi* von Tetsurō Watsuji“, 『防衛大学校紀要(人文科学分冊)』第110輯、防衛大学校、査読無、2014年3月、105~121頁。

轟孝夫「テクノロジーとデモクラシー——ハイデガー技術論の観点から——」、『情況』11月・12月合併号、情況出版、査読無、2013年11月、132~147頁。

轟孝夫「根拠律に対するハイデガーの立場」、『ショーペンハウアー研究』第18号、ショーペンハウアー協会、査読無、2013年11月、77~91頁。

Takao Todoroki, „Staat und Technik bei Heidegger und in der Kyōto-Schule“, Alfred Denker, Holger Saborowski(ed), *Heidegger und das ostasiatische Denken, Heidegger-Jahrbuch 7*, Verlag Karl Alber, 2013.8, pp.359~376.

轟孝夫「ハイデガーの労働論」、『実存思想論集』28、実存思想協会、査読無、2013年6

月、57~82頁。

轟孝夫「ハイデガーにおける悪の概念——「戦後」思想の一断面——」、『防衛大学校紀要(人文科学分冊)』第108輯、防衛大学校、査読無、2013年3月、31~52頁。

[学会発表](計4件)

轟孝夫「ハイデガーの「反ユダヤ主義」は何を意味するか」、第3回日独哲学会議「ハイデッガー像は、どう変わるのか?」ワークショップ、東京ドイツ文化センター、東京、2014年12月14日。

Takao Todoroki, „Gerechtigkeit aus japanischer Sicht—Unter besonderer Berücksichtigung des *Nihon rinri shisou-shi* von Tetsurō Watsuji“, GIP-Tagung im Rahmen des 4. Philosophiefestivals Hannover, Gesellschaft für Interkulturelle Philosophie, Hannover, Deutschland, 2014.3

轟孝夫「技術と倫理——ハイデガーによる悪の考察——」東京ドイツ文化センター図書館ワークショップ「危機や災害に直面しての芸術の可能性」、東京ドイツ文化センター、東京、2013年3月16日。

轟孝夫「ハイデガーの労働論」実存思想協会第28回大会、実存思想協会、関東学院大学、横浜、2012年6月30日。

[図書](計3件)

轟孝夫「ハイデガー「黒いノート」における「反ユダヤ主義」は何を意味するのか」、P.トラヴニー、中田光雄、齋藤元紀編『ハイデガー哲学は反ユダヤ主義か——「黒ノート」をめぐる討議』、水声社、2015年9月、97~125頁。

轟孝夫「学長ハイデガーの大学改革構想——『ドイツ大学の自己主張』——」、秋富克哉、安部浩、古荘真敬、森一郎編『ハイデガー一読本』、法政大学出版局、2014年11月、125~134頁。

Takao Todoroki, „Nishidas Philosophie des Staates“, Rolf Elberfeld, Yoko Arisaka (ed), *Kitarō Nishida in der Philosophie des 20. Jahrhunderts*, Verlag Karl Alber, 2014.3, pp. 106~117.

## 6. 研究組織

(1)研究代表者

轟孝夫(TODOROKI, Takao)  
防衛大学校人文社会科学群・教授  
研究者番号: 30545794